

## 古今集の「桜」と小野小町

立花 志保

はじめに

小野小町は、六歌仙、また三十六歌仙の一人に選ばれた平安時代を代表する女性歌人である。実在した事は確かだが、未だもって家系・出没年・身分環境など明らかでない部分が多い。正史またはその他の史料には全くあらわれていない。古今集の十八首、後撰集のやや疑問の残る四首など勅撰和歌集に歌が載せられており、また小町らしい歌を集めたといわれる「小野小町集」などを経て、「玉造小町壮書」や謡曲「通小町」などと説話や伝承となり後世の人々へと伝えられていく。実在の小町を捉えようと全体から見るのは困難である。

その中で、小町というものを明らかにしていきたいと思つた事が研究の動機となつている。小町研究において、近年の動向としては、秋山虔氏が（『小野小町的なるも

の』「王朝女流文学の形成」<sup>①</sup>）で古今集の小町を捉えている。更に小町伝説の本質をも探つていこうとする片桐洋一氏（『小野小町追跡』<sup>②</sup>）同氏（『在原業平・小野小町』<sup>③</sup>）がある。小町の歌における漢詩の影響を見つめるものとして、夢の歌の源泉を漢詩文、特に六朝閨怨詩において捉える後藤祥子氏（『小野小町試論』『日本女子大学紀要文学部』27号<sup>④</sup>）や、玉台新詠の閨怨詩から指摘する山口博氏（『閨怨の詩人小野小町』<sup>⑤</sup>）の存在がある。古くは、前田善子氏が（『小野小町』<sup>⑥</sup>）「花の色は・・・」の歌において唐の劉廷芝の、詩の一節の影響を受けていると示唆した。このように小町は内外において漢詩文の影響が考えられる。また民俗的な観点から小林茂美氏（『小野小町攷』<sup>⑦</sup>）は、詳細に考察している。また夢に「鶯鶯伝」の影響を指摘する大塚英子氏（『小町の夢・鶯鶯の

夢」『古今集と漢文学』<sup>⑧</sup> 古今集所収の全歌の分析を通

して歌人像を求める平野由紀子氏「小野小町」(『古今集』<sup>⑨</sup>)

などがある。伝説部分、つまり虚でなく実の部分である

歌自体から歌人としての小町像を洗い直すことが行われ

ている。このように流れは、私が考えているのと同様、

小町そのものへと迫るものへと変わりつつある。

私は、小町自身を捉えていくために小町の本来歌った

とされる古今集から小町を求めていきたい。今回は、古

今集による「桜」の歌い方を捉えていく事を主として、

小町の最も特筆される歌であり、唯一の四季歌である

「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるなが

めしまに」を覚えていきたいと思う。この歌の「花」の

捉え方は、花そのものと、花の衰えそして容貌、容色の

衰えという二つの意味にとられる。この「花」は「桜」

であるというのが一般的であり、私もそれに従って考え

ていこうと思う。そして、四季歌の中での小町を捉えて

いきたい。

## 二

「桜」は日本を代表する花、日本の文化を象徴する一

つとして、日本人に古くから親しまれてきた。しかし、

古今集以前の万葉集にあつては、必ずしも他の植物と比

べて特別な扱いはされていない。万葉集では、外来の珍

しいとされ、多く歌われていた梅と比べて半数以下であ

り、古今集と比較しても、その歌数の占める割合は比較

にならないほど少ない。花といえば「桜」という意識を

持つようになるのは歌数の多さから考えても、古今集以

降という事になろう。

まず、古今集の四季歌の春歌は、上・下あわせて百三

十四首ある。そのうち七十三首(桜という語が無いが、

花を詠むもの一首)と半分以上が桜である。これらよか

ら89までの四十一首は、全て詞書か歌の中に「桜」とい

う語がみられる。そして90から118までの二十九首のうち

90からは、「花」のみで、「桜」という語があらわれ

ていないが、「桜」として詠んだと考えていこうと思う。

これらを「桜」の歌群としてみる代表的な説は、松田

武夫氏<sup>⑤</sup>が挙げられる。松田氏は、49から89までを前半、90から118までを後半とし、その中で、前半、後半にも更にそれぞれ「咲く桜」「散る桜」があると説いた。時間の変化を古今集の歌のつながりから歌っているという事がみえる。

前半の「咲く桜」は49から63まで、「散る桜」は64から89まで、後半の「咲く桜」は90から103まで、「散る桜」は104から118までとしている。この中で隣り合った歌においては、同様な語句を用いたり、桜に対して動かされる心の状態を述べたりしている点で、歌の性質を同じくしている部分があるとされる。

まず四季歌の春歌による「桜」と人とのかわりを考えていきたい。

- (1) 人の家にうゑたりける桜の花の、花さきはじめ  
たりけるを見てよめる つらゆき  
ことしより春しりそむるさくら花ちるといふこ  
とはならはざらなむ

(巻第一・春歌上・四十九)

- 題知らず よみ人しらず  
(2) そめどののきさきのおまへに、花がめに桜の花  
をささせ給へるを見てよめる  
前のおほきおほいまうち君

年ふればよはひはおいぬしかはあれど花を見  
れば物思ひもなし

(巻第一・春歌上・五十二)

- (3) 桜の花のもとにて、年のおいぬることをなげき  
てよめる きのとものり

色も香もおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞ  
あらたまりける

(巻第一・春歌上・五十七)

- (4) 桜の花のさかりに、久しくとはざりける人のき  
たりける時によめける つらゆき

あだなりと名にこそたてれ桜花年にまねなる人  
もまちけり

(巻第一・春歌上・六十二)

- (5) 桜の花のさけりけるを見にまうできたりける人  
よみておくりける

わがやどの花見がてらにくる人はちりなむのち  
ぞこひしかるべき

(巻第一・春歌上・六十七)

まず春歌上の最初の歌で桜の咲き始めが歌われる(1)。  
ここでもう既に、「散るという事を習わないでほしい」と、  
「桜」は散るものという事を思わせた歌い方になってい  
る。また「桜」が心をもち、人に習う存在として擬人化  
されている。(2)は「自らは老いたが、花を見れば物  
思い一つしない」と歌い、その花とは、詞書にある桜の  
花、また、染殿の後である明子の栄華を誇っている状態  
を暗示している。(3)は「桜は美しさも香りも昔と同  
じように咲いているが、年を取っている自分は若い時と  
姿が変わってしまった」と歌っている。自らは桜と異な  
っているのである。(4)は「桜の花は散りやすく、誠  
実さが無いと評判になっているが、あなたのように一年  
の内にめつたにやっこない人も待っているので、決し  
てあだとはいえない」と、桜の花の一時的な散るという  
状況でなく、毎年必ず咲くということを抑えて、長い時

間から見ると桜はあだでないということ、まためつたに  
やっこない人も桜が咲くことによつて来るからという  
理由で、あだとはいえないと歌っている。めつたに訪れ  
ない人も桜を待つのだが、(5)では「花が散つた後は  
決して訪れない」とも歌う。

このように桜は、初めから散る事を暗示され、また散  
りやすいと歌われながらも、咲いている状態を強く歌い、  
咲いてから散るというだけでなく、昔という言葉を出し、  
色や香が変らないといったように、長い年月からも咲い  
ている桜を抑えているのである。  
次に春歌下の歌を見ていこう。

(6) ひえにのぼりて帰りまうできてよめる

つらゆき

山高み見つつわがこしさくら花風は心にまかす  
べらなり

(巻第二・春歌下・八十七)

(7) 題しらず よみ人しらず

のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世の中は

てのうければ

(卷第二・春歌下・七十二)

(8) うつせみの世にもにたるか花ざくらさくと見し

まにかつちりにけり

(卷第二・春歌下・七十二)

(9) 雲林院にて桜の花をよめる 　そうく法師

いざ桜我もちりなむひとさかりありなば人にう

きめ見えなむ

(卷第二・春歌下・七十七)

(10) さくらの花のちりけるをよめる 　つらゆき

ことならばさかはずやはあらぬ桜花見る我さへに

しづごころなし

(卷第二・春歌下・八十二)

(11) 桜のごと、とくちるものはなし、と人のいひけ

ればよめる

さくら花とくちりぬともおもほえずひとの心ぞ

風も吹きあへぬ

(卷第二・春歌下・八十三)

(12) 寛平御時きさいの宮の歌合の歌 　そせい法し

花の木もいまは掘りうゑじ春たてばうつろふ色

に人ならひけり

(卷第二・春歌下・九十二)

(13) 題しらず 　よみ人しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むこと

はいのちなりけり

(卷第二・春歌下・九十七)

(14) 花のごと世のつねならばすぐしてし昔はまたも

かへりきなまし

(卷第二・春歌下・九十八)

(15) うつろへる花を見てよめる 　みつね

花見れば心さへにぞうつりけるいろにはいでじ

人もこそしれ

(卷第二・春歌下・一〇四)

(16) 題しらず 　よみ人しらず

ちる花をなにかうらみむ世の中にわが身もとも

にあらむものは

(卷第二・春歌下・一〇七)

(17) やよひのつごもりの日、花つみよりかへりける

女どもを見てよめる

とどむべきものとはなしにはかなくもちる花ご  
とにたぐるころか

(巻第二・春歌下・一三三)

(18) さくらの花のちるをよめる きのとものり

久方のひかりのどけき春の日にしづごころなく

花のちるらむ

(巻第二・春歌下・八十四)

69から89までの前半の「散る桜」という歌群では、(6)の貫之の歌以外は本文かまたは詞書に「散る」または「うつろふ」の語がある。これは直接、桜花が散ることを述べている。

(7)は「桜の花は、名残無くすっかり散ってしまうのがいい。桜の花と人は同じで、この世の中に生き長らえると最後には憂い目にあつてしまうので」と未練がましく散り残る桜花を、人間の老醜や失意などに喩えている。(8)は、「桜花は儚いこの世に似ていて、咲くと見たのも束の間、一方では散つてしまった」と無常観を歌

う。(9)は、「桜のように私も散つてしまおう。この世というのは一盛りしたならば、嫌な様を人に見せてしまふことになるだろうから」と、ひとさかりを花の盛んな状態、人でいえば自らの盛んな状態である、最も華やかな活動の時期をそれぞれ示し、桜の散るように自らも散るまで、盛りから散るまでの桜の動作を、人の動作、そして自らが散る理由を重ねて歌っている。(10)では、「咲いても散るのなら、いつそ咲かないでほしい。慌しく咲いて散るのを見ている自分までも心が落ち着かない」と桜が咲いて散る状態に、自らの心も慌しくなる。(11)は「桜の花が早く散つてしまふとも思われない。桜の花は、風が吹くのを待つて散るが、人の心は風も吹き終わらないうちに変わつてしまふ」と桜よりも早く変わるのが、人の心だと歌っている。(12)は「花が咲く木でも掘つて植えまい。春になると、たちまち咲いた花の色が変わつて散つていく、その様をきつと人がまねして心変わりするだろうから」と歌う。(13)は「毎年春を巡るごとに桜の花の盛りはあるが、お互いがこうして会うことは寿命のある間だけです」と歌う。(14)も「毎年

変わらず咲く桜の花のように、世の中がもし不変なものならば自分が過ぎってしまった昔は、再び帰ってくるであろうに」と無常観を歌う。桜は毎年変わらず咲くが、自らは寿命あるのみで決して昔へ戻れない。(15)は「散る桜の花を見ると、心までも散って他へ移っていくよ。その移り気を顔色には出すまい。人がその心を知るかもしれないから」と色褪せる桜の花を見ることによって、移り気な心があらわれたと歌う。(16)は、「私自身も花と一緒にいつまでもいるものだろうか、いや花と同じく散っていく」と歌う。(17)は、いくら惜しんでもとめることができない桜の花を、詞書によって女性も共に止めることができないとしており、散る花ごとに後を追ってゆく私と、とめられない桜の花を女性に、散る花を自分へと歌っている。

このように四季歌における「桜」は、「散る」または、「うつろふ」という語によって、恋の心が変わる状態を歌う。

(2)で「桜」は明子という女性の栄えを喩えており、桜が散る事を暗示することもなく、「桜」の咲き誇った

美しい様子と、前のおほきいまうち君の年老いた姿との対比がなされている。「桜」の花はあだなりと評判になるのは、散りやすく変わりやすいからだろうが、「桜」の花より変わりやすいのは人の心(10)や、毎年「桜」は必ず咲くのに対して人は寿命がある(13)不変でないの昔は帰ってこない(14)桜花はうつせみの世に似ている(8)と、ここでは人の世の無常観は、散る花が常で無いという事と通じるものがあるとして歌っている。

四季歌の「桜」は、咲く事よりも僅かな期間で散る花という性質を活かした歌が多くなされていた。散ることと心変わりとが重ね合わされたり、また早く散るということよって「しづ心なし(10)」「しづ心なく(18)と桜を見る自らの心まで慌しいと桜の早く散っていく様子を人の焦っている様子と重ね合わせたりして捉えるなどを強く捉えている。

四季歌において、春は「桜」というイメージが定着し、多く歌われている。それ以外の巻ではあまり多く詠まれない、恋歌においても多く詠まれていないようである。次に「桜」と人とのかわりを四季歌以外の歌から考えて

みたい。

三

四季歌以外の「桜」においてみていこう。

(19) ほりかはのおほいまうちぎみの四十の賀、九条

の家にてしける時によめる

さくらばなちりかひくもれ老いらくのごむとい

ふなる道まがふがに

(巻第七・賀歌・三四九)

(20) さだやすのみこの、きさいの宮の五十の賀たて

まつりける御屏風に、桜の花のちるしたに、

人の花見たるかたかけるをよめる

ふちはらのおきかぜ

いたづらにすぐる月日はおもほえて花見てくら

す春ぞすくなき

(巻第七・賀歌・三五二)

(21) 内侍のかみの、右大将藤原朝臣の四十の賀しけ

る時に、四季の絵かける

うしろの屏風にかきたりけるうた

山高み雲るにみゆるさくら花心の行きてをらぬ

日ぞなき

(巻第七・賀歌・三五八)

(22) 山にのぼりてかへりまうできて、人々わかれけ

るついでによめる 幽仙法師

別れをば山のさくらにまかせてむとめむとめじ

は花のまにまに

(巻第八・賀歌・三九三)

(23) 題しらず よみ人しらず

しひて行く人をとどめむ桜花いづれを道とまど

ふまでちれ

(巻第八・賀歌・四〇三)

(24) 巻第十 物名

かにはざくら つらゆき

かづけども波のなかにはさぐらわで風吹くごと

にうきしづむたま

(巻第十・物名・四二七)

(25) 人の花つみしける所にまかりて、そこなりける



人のもとに、後によみてつかはしける

つらゆき

山ざくら霞のまよりほのかにも見てし人こそ恋

しかりけれ

(巻第十一・恋歌一・四七九)

(26) やまとに侍りける人につかはしける

こえぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみき

きわたるかな

(巻第十二・恋歌二・五八八)

(27) やよひばかりに、物のたうびける人のもとに、

又人まかりて、せうそこすとききてつかは

しける

露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとに物思

ひぞつく

(巻第十二・恋歌二・五八九)

(28) 題しらず　よみ人しらず

わがこひにくらぶの山のさくら花まなくちると

もかはずはまさらじ

(巻第十二・恋歌二・五九〇)

(29)

君によりわが名は花に春霞野にも山にも立ちみ

ちにけり

(巻第十三・恋歌三・六七五)

(30)

ともり

684 春霞たなびく山のさくら花見れども

あかぬ君にもあるかな

(巻第十四・恋歌四・六八四)

(31) 桜をうゑてありけるに、やうやく花さきぬべき

時に、かのうゑける人身まかりにければ、

その花を見てよめるきのもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれをさき

にこひむとか見し

(巻第十六・哀傷歌・八五〇)

ここから見ると、(19)は「桜花が散り乱れれば、老

いが来るといふ道がわからなくなるだろう。そうしたな

ら来ないだろうから」と歌っていて、桜花は老いへの道

を散ることによりわからなくさせる。(20)は「無駄に過ぎた月日とは思われなくて花を見て暮らした春の日、花盛りの日がわずかとなり少ない」と歌っている。(21)は「その咲いている山が高いので、桜花に心がいつて折つてめではやさない日はない」と歌う。(22)は「嵐に桜が散り乱れてほしいなあ。花が落花したため、行くべき道も見分けがつかないので、立ち止まってしまふ」と歌う。(23)は「止めようとしても聞き入れず、無理やり行く人を止めるだろう桜花、その桜花はどこが道であろうかと思分けがつかなくなるまで散れ」と歌っている。(24)は物名歌で「かにはざくら」という題が詠み込まれている。(25)は恋歌だが、「山桜を霞のすきまから見るようにみたあなたが恋しい」と歌っている。「ほのかにも見てし」という語が、実景にも人の行動にも捉えられて歌われる。(26)は「山を越えて吉野に行かないうちには桜花が人づてにだけ聞こえてくる」と、大和に侍りける人、貫之が思いを寄せている女の比喻としており、桜花はその女性の噂というように捉えられる。(27)は「いささかでない心で、その時咲いていた桜の花を思う

ようにあなたを思い始めて、花を散らす風が吹く度に、他の男との噂を風の便りに聞くことだ」と歌う。(28)「私の恋に比べるという暗い山である暗部山の桜花は間断無く花弁が散るが、私の恋の思いの数より数は優っていない」と桜花のあれだけの花弁の多さより、自らの恋の思いの枚数のほうが多く、また間断無く散つていてもそれでもなお自らの恋の思いの早さも優つていと歌う。(29)は「あなたによつて私の名は華々しくなり、桜の花にたなびく春霞が野山一面に立つ」と歌う。(30)は「春霞がたなびく山の桜花のように、いくら見ても飽きない君のようだ」と歌う。友則が「君」と歌つており、女性の立場となつて歌を詠んだようだ。(31)は「はかないといわれる桜の花よりも、人のほうがはかなく散つてしまった。花と人とどっちを先に恋しがらうと思つたか。もちろん、花が先だと思つていたのに」と歌う。題詞には、花が段々と咲こうとしているのに、植えた人が亡くなつていたため、この歌が詠まれたとなつている。桜よりも人が先にはかなくなり、桜より先に人を恋しく思うこともあるのであつた。

ここで「桜」は、散ると老いの道がわからなくなる花である(19)。落花することによって、周りが見えず、見分けがつかなくなるのである。そのように散る事を歌う。そのような歌は何首かある。ここでは落花を否定しない歌も見られ、満開から散る状態であるが、散ってしまうことに対してどう感じるかというより、桜の花の散る様子、周りが見えない状態わからなくなる状態を引き出す。散って欲しいと歌われたりもする。(25)、(27)は、実景の桜と人とを重ね合わせている。(25)は山桜に霞がかっていてその桜をすきまからわずかに見るように、僅かに見た人が恋しいと歌う。自らが見た女性を霞がかつた桜とし、「ほのかにも見てし」という行動、女性にも桜にもとることのできる歌い方によって重ね合わせている。(27)は、咲いていた桜を思うように相手を思い始め、また花を散らす風が吹くごとに他の男との噂を風の便りに聞くと、桜への思いと相手の思いがかかわり、また花が風によって散る状況、その風から他の男との噂が流れてくるとしている。

散る風が噂を運んでくるからか、(26)は、桜花が女

性の比喩とされ、その桜花は、女性そのものというより、女性の近況、他の男との噂というようなものだったのかもしれない。また、(30)において友則は、山の桜花を君への比喩としている。ここでは、女性の立場として歌を送ったようで、桜花を見るようにいくら見ても飽きない君と歌っている。ただ、ここでは霞が関わっており、「霞がかかっている桜花」についての歌い方になっており、桜花そのものだけを指しているのではなく、霞と桜とが重なった状況においての美しさを歌う。

その中で、(28)は自らの思いを桜花の花弁と捉えて歌う。私の恋の思いは、桜花が間断なく散り、花弁を散らす、その花弁の数より、数は優っていると歌う。また桜が間断無く散る早さより、自らの恋の思いの早さも優っている。この歌においては、自らと花とは別のものとして捉えられており、そこにおいて比較がなされている。

桜において万葉集では散らないでほしいといった歌い方がされていたのだが、古今集においても散る事を習わないでほしいという歌い方がされる。しかし、散る事に

否定的でない歌も見られ、人の方が早く散りやすいと場合によっては歌う。それは、桜が咲いていても自らは散っていると自らの散りの方に気をとられてゐるからだとも考えられる。そこには、花が散るといふ事における肯定や、喜ばしいという感情は表れてはおらず人と重ね合わされたために桜にも人にも無常観があらわされ、その中で人の方の無常観がより優つてゐると歌われる。

#### 四

古今集の「花」においては、別稿に委ねたいが、大半は、花の言葉において、人への連想を促し、人の様子へと歌つてゐた。歌のことばにおいての発想が強く占めてゐるのである。

そのように、人を喩える時に、語からあらわされる花を歌う事が多い中で、「桜」は咲く、散るといふ性質から歌われるものが多くあらわれてゐた。歌の全体の流れとしての「咲く桜」「散る桜」といふだけでなく、歌の中に於いても、「桜」の咲く、散るが強く捉えられてゐた。「桜」の性質が十分に發揮されてゐたのである。そ

して、人がその「桜」に対しての歌い方を様々にしていることがわかる。また実景としての「桜」も歌われており、そこでは、いくら見ても飽きない君のようだといふ歌い方もあるが、「桜」が霞にかかるといふ曖昧な美しさを捉えている歌も多く、「桜」そのものだけでなく、霞という現象がかわさつたことに対しての美しさ、見えないうことへの美しさから、わずかに見た「桜」と人とを重ね合わせて歌つてゐる。また咲くことから散ることへの歌としては、「桜」が咲いた時にあなたを思い始めたが、散らす風が吹くように他の男との噂を風の便りに聞いたと、「桜」が咲いてから散るまでを、最初咲く時には、女性を思い始めたと言うが、風が吹くことと、風の便りに届く噂をかわらせて歌つて相手の心変わりも歌つてゐる。

このように咲く、散るといふ花の性質において歌われているのは「桜」が主であった。特に散ることにおいて「桜」といふものが変わつていくと歌われてゐた。「桜」は最も多く、そして散ることだけでなく咲くことにおいても歌われており、咲くから散るといふ一連の動作は古

今集においてあらわれたものであった。

また、「桜」も人と同様に無常観から捉えることができ、その同様な意識によつて歌われる。しかし、「桜」と人とは、決していつも同じものとして捉えるのではなく、対比や、同じくするものであつても、人と桜とは別のものであるという意識をもつて、桜の性質から、様々な角度において人の様子へとの中で表現されていくのである。

おわりに

これまでみてきたことをふまえた上で、「花の色は うつりにけりな いたづらに 我が身世に経る ながめせしまに」という歌を、古今集の時代における意識から見ていきたい。

中世の注釈においてのこの歌の一般理解は、「花の色」に容色が含まれているとなつておいる。しかし、古今集においての「花」は、花の状態と人の状態、心が歌われるというよりも、語の洗練が深まつた歌い方がされている。その中で、古今集の「桜」においては、花の性質が詠まれていたが、これら花全体においても、また「桜」

においても容色としてまで歌われるには至っていないようである。

この容色を歌っているとする理由として「中世の前、すなわち平安時代においてもおそろくは、そうであつただろうと思わせるに充分であり、そしてその方が小町の後の伝説におけるイメージの形成のためにはより都合がよいことも確かである。」と片桐氏はこのようにいつているが、小町が、自らの容色を「花の色」としたという解釈は、後の人によるものであつて、古今集の中においては明らかではないように私は思う。それは小町がその時代の撰者において四季歌にとられたというところからも見る事ができる。その事からも時代の意識から考えるに、四季だと捉えられる歌であつたということになる。

また古今集の同時代の「桜」の歌の意識から見ていくと自らの容色を桜に託しているということをはつきりとは断定できるまで至らないように考えられるのである。

小町は、歌表現の細分化が始まり、共通の意識の中で歌の題材が固定されて、その中に表現を求められた、後の時代の女性歌人伊勢ほどには、観念的な題材にとらわ

れず、比較的歌の表現が自由であったようである。そこで、自らの興味、自らの情趣を歌へ取りこんでいく事が可能であった。この歌はそうして詠まれた。古今集の「桜」の歌い方の意識を見ていったが、小町の歌も、古今集の「桜」と同様に咲く、散るといふ様子における状態から歌われた。その中で、桜という花を、他の人がみていないという歌は歌われていたが、そこに「我が身」をおき、自らが「桜」をみていない状況を歌ったのは、小町だけであった。「桜」が散ってしまう事を惜しむ歌はあるけれども、小町は、そこで惜しむのでなく、「我が身」のように桜が散ってしまったという捉え方をしてるのである。小町は、四季の歌を詠むにしても「桜」だけを歌うのでなく、そこに「我が身」を照らしあわせなければ歌うことができなかつたのである。そのように小町は同時代における意識との関わりをなしつつ、四季歌の枠をこえた自らの「桜」を詠んだのであった。

注

① 「小野小町のなるもの」『王朝女流文学の形成』秋

山處 塙書房 1947

② 『小野小町追跡』片桐洋一 笠間書院 昭57

③ 『在原業平・小野小町』片桐洋一 新典社 199

1

④ 「小野小町試論」『日本女子大学紀要 文学部』27

号 後藤祥子 昭53・3

⑤ 『閨怨の詩人小野小町』山口博 三省堂 昭54

⑥ 『小野小町』前田善子 三省堂 昭18

⑦ 『小野小町攷』小林茂美 桜楓社 昭56

⑧ 「小町の夢・鶯鶯の夢」『古今集と漢文学』大塚英

子 汲古書院 平4

⑨ 「小野小町」『古今集』平野由紀子 勉誠社 平5

⑩ 松田武夫氏『古今集の構造に関する研究』（風間書

房 昭40年）による

⑪ 修士論文によつて古今集の「花」というものを詳述

した。

⑫ ②に述べた片桐洋一氏『小野小町追跡』（昭57年 笠

間書院）

「どちらの説でもよい」としつつも、中世の一般的

理解、また後の小町のイメージより容色を含む方向で捉えている。

また『古今和歌集全評釈（上）——全三巻——』においても、「花の色に託してみずからの容色の衰えゆくことを嘆いたとする解釈も、それほど不都合ではない。」としている。

『古今和歌集以後』（笠間書院 2000年）では、平安鎌倉時代の人達には、特別に注釈するものがないということ。しかし、室町時代の後期の宗祇によつて「花の色はうつりにけりな」は「我身の衰ふること」を喩えていると明言している事をあらわし、時代の古典文学の「読み」というものを言うにとどまっている。

古今集は『古今和歌集』窪田章一郎 角川文庫

『古今和歌集』佐伯梅友 岩波文庫

を参考にした。

（本学大学院・博士前期課程）